



中朝文鑑
五

5
4458
5



門 5
號 4458
卷 5



奉の文體了八

和讚 奉免吐才町註見 空山前贊 空山後註見

我杭讚 空山帝贊 負讚 負讚 讚

致柱自讚 讚 徒然讚

銘類

花桶銘 柳木銘 着花銘 詠硯銘

古硯銘 不四銘

大明正徳

昭和九年
九月二十八日
購末

淨土和讃

親友鳥重人

彌陀ノ名号唱へて信心ニコトニ得ルハ憶念ノ心常ニシテ
 仰恩報スル思イアリ折言願ハ思誤ラ疑ヒテ御名
 ヲ称スル往生ハ宮殿ノ中ニ五百歳全シテ過トフ詭給フ
 任云此讃ハ建長六二年ニ聖人ハ十二歳ノ御作ナルカ
 和讃ニ帙ノ中ノ西文字ニシテ一部ノ大意ヲ知ラレタ給ヘリ
 トソ但シ憶念ノ心ト云ルハ仰ノ他カラ云ハレルナリ誠ニ
 文章博達ノ家ヲ出テ思ハルニ字ニ一字ヲ建給ル
 本ヨリ安心ノ法内ニシテ至信貴人モ自己ノ智能ヲ愧ヘク

張と本も他カノ因ハ傳ラレシヤ仰ハハ物ニ思議
 ノ子ヲ疑ハス深ク信シ高ク稱セヨトナリ

卒見望小町珠貝

芭蕉庵

あまのりく〜 裏もわら〜 美しきよ〜 くれの
 人〜 け〜 け〜 け〜 け〜 け〜 け〜 け〜 け〜
 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜
 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜
 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜 今〜

任云此一信備短筒ナカラカテ箇ノ尊字ヲ用クニ箇ノ裏

あれらあつての人此用ひんさうなれども今も葛梅のあはれを
と連言のゆゑも用ひあつて一はあつてこの花を
とあつてそのあつての用あつてそのあつての人のあつてあつて
とあつて一は花とらうめて一はあつてあつてのあつての上
一蓮花とのらうめて一はあつてあつてあつてあつてあつてあつて

任云此説ハ全ク俳諧ニシテ先ハ我花ニテニ題ニテニテ
去レハ春ノ夜モ秋ノ曉トケテト長短ノ情ヲ二句ニ縮ムル筆
力ノ自在ヲ極スシテ次ニ天鶴絨ノ花ヨリ大名ノ隱者トハ
名言ニシテ味ノ段ハ一篇ノ筆占ナリ然レハ蓮ノ花ノ
詩ヨリ我朝ノ膝枕ニテ二十ニ首ノ故古又古ヨリ用ルニ

腰ニ割リト云ル古人ノ文章ニモ過タラズ果シテ花ノ名
カノノ詞ニ連言ノ儔ヲ言メタル者ヲ俳諧ノ筆致トシテ
一蓮花生ハ文ノ虚實ト知レ但シ作者ハ大野本由ニシテ
別姓ハ沈藤ナルカ加納ノ城下ニ在ナラシ在宇ニシテ改志
アリト云

蓮亭賛

甄珣石川

世ノ神曲良の像と云ひて一蓮亭のふかふか
たのめらるる罪業をくくしむるまよとあつてあつてあつて
文節と株々たるあつて一は花と一は花のあつてあつてあつて
人とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

ノ掛物ニ對シテ暫クニ皇ノ徳ヲ論スニ似テ實ハ授様ノ新
古ヲ云ヘリナリ然レハ言テ天ノ實有ル牛鯉ノ虚無ナル
例ニ虚無ノ法アリト稱スレ況ヤ此ノ固ノ或人ニ古来無據
ノ或人ヲ聖子テ誠ニ文式ノ論字ヨリ曲折深遠ノ体ヲ
尽セリ去レハ作者ハ山田中ナルカ別姓ハ鉈尾ニ濃ノ上有知
ニ住スヤ以テ醫術ヲ業トセリ陳思ハ其家ノ領子タレ
佐シ上有知ノ順カ和名ニムル有知ノ里ノ上邑ナリ

合見讚

鳥居路人

在ナリ言フヨリ世のこともおありとやんをま

美のあ櫻山のかされて喰ひ中合見車の請よあそ
地のゆり山の畑の一つてまのようめのくまれはら
今らすませりえあんきまのるのうま濃り柳の
心とくやふあよとらるおの加へ招居のまらと
けうーきらにいのまおといまいわん文記とをれ
みの回言あしとれと押いわすいまらう今
くくまのの記念しらして行くくまの文記
けららいてたの合見車あまあまらりらり柳の
東西とあまら伊勢とららあまら上川の向に橋の
あまら晴好雨春の野あまいあまら雨を柳風

花月の情と片くく一狐とあはれも花とあはれて
いさやるとそのおん人さへさくし合員とこのあはれ
夢の中へ合員とそのおん人さへさくし神念ふまは
手端の功とほむし一はくし用と清きむし好し
静坐しきしあはれとあはれとあはれとあはれと

合員護護

東花坊

世より曾我十郎の詞も合員を語るのほは
くんとらつとあはれとあはれとあはれとあはれと
くんとらつとあはれとあはれとあはれとあはれと

花月の情と片くく一狐とあはれも花とあはれて
いさやるとそのおん人さへさくし合員とこのあはれ
夢の中へ合員とそのおん人さへさくし神念ふまは
手端の功とほむし一はくし用と清きむし好し
静坐しきしあはれとあはれとあはれとあはれと

かんしんえんをきりぬるにんしんをたをいひけりて言ふに
 んありてはめりしとま牛とひきりて推せ
 子もる人けけり標をみりてはひしと金子の
 ぶしをさしりてねを文字子の言ふと頭とひきり
 ねき祥にの言ひと眼とけりしとて書よと書り
 けりしと希有のおのこふめりきりてなれり
 けりしとあをいしとて書よと書よのけりしと
 けりしと金子のふ帯とてあふりけりしとけりし
 筆ふたさの船にけりしと西のけりしとけりしと
 とけりしと人のけりしとて申ふあるおまらるは

雅^{ナカ}魚^{イサ}を^シ持^ツと^リと^ク本^ホ松^{マツ}と^ト帯^{オビ}と^トく^クし^シぬ^ヌい^イる
 と^トん^ンけ^ケら^ラん^ンけ^ケり^リし^シと^トの^ノ境^{サカイ}界^{カイ}あ^アり^リて^テ天^{テン}を^ヲよ^ヨま^マ
 耀^{ホトケ}の^ノけ^ケり^リと^トな^ナれ^レと^トけ^ケり^リと^トの^ノよ^ヨめ^メの^ノ金^{カネ}と^トあ^アめ^メと^ト海^{ウミ}
 と^トけ^ケり^リと^トの^ノき^キと^トな^ナる^ルと^トき^キと^トな^ナれ^レと^トの^ノな^ナと^トな^ナ
 と^トけ^ケり^リと^トの^ノ名^ナと^トな^ナれ^レと^トの^ノ浦^{ウラ}と^トな^ナれ^レと^トの^ノ浦^{ウラ}
 と^トけ^ケり^リと^トの^ノら^ラの^ノら^ラと^トの^ノら^ラと^トの^ノら^ラと^トの^ノら^ラと^トの^ノら^ラ
 と^トけ^ケり^リと^トの^ノ薬^{ヤク}の^ノ松^{マツ}と^トか^カ角^{カク}の^ノ松^{マツ}と^トけ^ケり^リと^トの^ノ松^{マツ}
 と^ト孫^{マコ}の^ノ袂^{タビ}と^トま^マら^ラと^トの^ノ茶^{チャ}と^ト角^{カク}の^ノ茶^{チャ}と^トの^ノ茶^{チャ}と^トの^ノ茶^{チャ}
 と^トけ^ケり^リと^トの^ノ富^{トモ}と^トの^ノ船^{フネ}と^トの^ノ船^{フネ}と^トの^ノ船^{フネ}と^トの^ノ船^{フネ}
 と^トけ^ケり^リと^トの^ノけ^ケり^リと^トの^ノけ^ケり^リと^トの^ノけ^ケり^リと^トの^ノけ^ケり^リ

西行ニ天毫ノ件ト知レシ或ハ滅明和尙トハれ子モ山人ノ貌ヲ
見テハ鉢坊ノ如ク思ハレシニ和尙ノ子ハ勿躰ヲ云ル是ヲ双鳥ノ
文法ニシテ他ノ凡ハナル筆力ナリ宰我モ滅明モ家語ニシテ又
アリ然ラハ此ハ編ニ抑揚ノ法アルハ結語ニ向ニテ人マシトハ
世情ノ讚詠ニ及ハサレ謂テラシモ此讚ノ奥書ヲ見レ先師
七名ノ夏十ハ惟然ト同年ノ作ナレ但し惟然ハ夏懐ノ
素生ナリ

叙柱自讚

垂其角

ぬらりらよ夏あけのけりけり
むらりらよ夏あけのけりけり

けままのりりし曼卿よるる
けままのりりし曼卿よるる

往云北一季ハ懐ノ東雨亭ニ在リテ屏風ニ自筆ノ色紙
卷ラテ四子ノ題名ヲ加テ例ニ送場ノ滴色トナセリ去レハ
定テ水郷ノ冬ニ春ノ夜ノ言ノ浮橋ト云レテ筆ニ別ル描
雲ノソラトハ無心所着ノ所ニシテ此郷ノ风格ハ千吟万詠ニ
此体ナラテ吾も一生ニテ子ナリ故ニ彼カ他語ニ世ノ耳ニ
落ナルモ教多アリテ是ニ辞世ノ句ニ至リテハ骨ノ曉近シ
キリノストムルハ春ノ曉ニ秋ヲ思イ寄セタル誠ニ今終ノ哀ニ
事来ノ事来トハ是ラ云レ但し其角ハ武陵ニ遁放ス事ナリ
彼カ他語

讀徒焦讚

江北房

世に傳れく多のくつるを聞かば其公の心遣り
 らぬを甲ふ入るよりてくやされ常時其公の
 のおとまりて二万四千の故より一説く
 後とてけりてては其連從らば儒は是
 の説くことけり儒師のそめたる人たりけり
 けりて無我の心けりて折るを折るの意とて
 作るの情とて折るの心とてけりてけりて
 東華房ありて藤園のの辨折とて武慶の

の節説とてけりてけりての讀九卷とてけりて首
 凡例大綱より別録の園公賢の園大曆の教とて
 或らば其好の艶書論とてけりて或らば其好の
 の地とてけりてけりて其末の十五折とて七章八
 の五ふりて其末の二百四十章折とて其末の
 とてけりて其末の折とてけりて其末の折とて
 けりて其末の折とてけりて其末の折とて
 けりて其末の折とてけりて其末の折とて
 七章ありて其末の折とてけりて其末の折とて
 とてけりて其末の折とてけりて其末の折とて

一部を各々の法語を以てしつるはれりや 抑後法師の
一節より諸所の人此を以てしつるはれりや 例して其好の
情の抑揚を裏返と云ふは 此れ文字の面を以てしつる
やまのに文理不到のあつた馬人無我の言を以て
自己の及ぶたとすゝあつて 此れは 法語の證を以て
ふれ好まぬ色の強を借して色を以てしつるはれりや
人の言後とてしつるはれりや 此れは 法語の證を以て
の言法を以てしつるはれりや 此れは 法語の證を以て
くわりのしつるはれりや 是非の喜怒の言を以てしつる
儒仏の言を以てしつるはれりや 長衣の二段の人の大教と
す

其の意

ははの好色の言を以てしつるはれりや 一部の趣意を以てしつるはれりや
て詞を以てしつるはれりや 此れは 法語の證を以てしつるはれりや
かまひりや 此れは 法語の證を以てしつるはれりや
證を以てしつるはれりや

何云此證ハ徒然ナリ大言ニシテ文章ノ鼓舞ヲ用イ
實ニ其證ヲ證スト云レシモハ固ヨ良基公トハ觀應心
比ノ接相ニシテ伊予入通トハ今リ了俊ナリ次ニ馬辨抄ハ
故禪園ノ同書トヤニ兼冬公ノ真書ニシテモ文正一年ト
アリ云ハ後花園ノ所ナリシモ此抄ハ書キテモ
善ク傳ヘスト云一タリ或ハ公賢ノ園本曆ハ全部反

本用之盛

ノ史書ナリトフ其世ニ故アリテ減板ナリト其向ニ通好ノ
夏跡ヲ載スルニ近慶ノ始ヨリ應守ノ末ニテニ總テハ
四十年段ハナリトフ然レハ此護ノ趣ハ徒然テ護ノ本支ヲ
欠テ其段ノ下ニ通明モサランニ

銘類

花桶銘

離立甫

いふこと一甲のふとさくちれき口あしんじのち
のらふちわいよいつとういふのいさきまふん
ひし流のくぼのさくとほりし甲とまふん
さしありていれされし一

ね云此一宮命ハ花桶記ナリト或人ノ合傳ニクル其桶名ヲ
言野ナリト云ハニヤ然レテ中間ニ有ク右ナラ置テ前後ハ
序詞ノ筆格アリテ異ニ銘ノ一字ニ題ナリ但し此作者ハ
中比ノ御士ニシテ離トハ此人ノ家名トフ

花桶銘

藤知行

あまねくはしらのわのあらまらちらしむし
ふひれそそのほよこららなをけあふは
まらるるとはかかわしうわわんせ
あまねくはしらのわのあらまらちらしむし

のまへにやちかひのうらみはなほなほとていふはなほ
 芥子ヤライのちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 くらゐのちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 比のちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 ちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 鉄丁のちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 あつた大根はらうとていふはなほとていふはなほ
 起してはなほとていふはなほとていふはなほ
 入るはなほとていふはなほとていふはなほ
 のまへにやちかひのうらみはなほなほとていふはなほ

うらみはなほとていふはなほとていふはなほ
 芥子ヤライのちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 くらゐのちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 比のちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 ちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 鉄丁のちかひもなほとていふはなほとていふはなほ
 あつた大根はらうとていふはなほとていふはなほ
 起してはなほとていふはなほとていふはなほ
 入るはなほとていふはなほとていふはなほ
 のまへにやちかひのうらみはなほなほとていふはなほ

トナリ去レ世間ノ議ニ或ハ南禪寺トモ永平寺トモ大檀中ノ
秘詞ナルヲ今ハ二十種ノ起詔トナレ創ニ此詔ノ筆格ヲ得
蕉内ニ此作者アリト云ヒ況ヤ其銘ノ洒且格ナル漢ニ寒山
詩風ヲ傳ヘテ爰ニ詔者ノ曉ラ云ルナリ

著者略 并序

西華坊

其裏里ノゆるり此節ありて所作ノ筆格ノ此詔を以て
筆ノ風流なり山林ノ格と云テ市井ノ間と云
ト云レ世ノ格ノあましくあしく此詔を以て
ト云テ其筆格ノ此詔の交ニ此詔を以て

おぼしきことらばいひぬらん中庸の格もわかれん
何んぞか用あることとていひぬらん此詔を以て
いひぬらん此詔を以ていひぬらん此詔を以て
いひぬらん此詔を以ていひぬらん此詔を以て
いひぬらん此詔を以ていひぬらん此詔を以て
いひぬらん此詔を以ていひぬらん此詔を以て
いひぬらん此詔を以ていひぬらん此詔を以て

若者の物なりと云レたは
あつておぼしき格の
あつておぼしき格の
あつておぼしき格の
あつておぼしき格の

四句二韻ナラ後ノ銘語ニ云クツケタル是ヲモ有尾韻
ニシテは格ハ千妻一口能ナラシヤ

古規銘

并序

東花坊

い家と規ありたの規を大石内蔵にあはるし
の人れおはるし一室の持よよらるる
のちの武取としん今此世の鑑よりて
一とありしと一とありしと一とありしと
又ありしと一とありしと一とありしと
朝事としん今此世の鑑よりて

麾下此四十余人もあはるし武の其角の
とありしと一とありしと一とありしと
一とありしと一とありしと一とありしと
規の今此と一とありしと一とありしと
とありしと一とありしと一とありしと
て之國の浦のは月よありしと一とありしと
ありしと一とありしと一とありしと
ありしと一とありしと一とありしと
ありしと一とありしと一とありしと
ありしと一とありしと一とありしと

中世の文章のよきものこゝれありて次の世の世
もいふべきあり。あるとち邦のありとち邦は
越後の世とわく忠義の人れきしきあり
あり。後をせらるればきしきしきとせらるる
の舟くくし。

任云世銘モ長短句法ナカウ五章ニテナニ句ハ中ノ三章
ハ六句ニテ二韻ナリ是ヲ青尾ノ韻ノ定法ト云ツレテ前ニハ
著者銘ニ古法ヲ守リ後ニハ古法銘ニ新格ヲ用イタル
此等ニ文鑑ノ公論知ルレ但し世題ハ君子西カ銘ニ
效ル彼カ銘バノ上句ニモ亦モ六韻ノ論ハ有ナカウ例ニ

漢約ノ序はハ東ナレ去ハ君舟臣水ハ貞觀政要ノ詞
ヨリ總テ文武ノ兩用ヲ云ルニ花ノ木陰ハ忠度ノ意ヲ含
馬上ノ稱ホハ曹操ノ詩ヲ寄セテ知漢ノ文武ニ和漢ノ詩
ヲ對セル誠ニ文章ノ神ニテ博知ノ自在ニ致馬久レ然ルニ
大石ヤ忠節ハ文苑武林ニ名ヲ稱シテ古今事功ノ武士
或ハ生前ノ文章ヲ尋子或ハ死後ノ調度ヲ求テ心アル人
ハ秘蔵セリトシ但し播東ハ之國ニ佳ス素生ハ播州人ナリ
不血銘
保よ平

何れを言ふに八ありんとか。

凡そ此銘ハ短論ニシテ韻ヲ用ルニ奇法アリまは古今ノ詞ヲ
借ツテ今人ノ語ニ取合セテハむモ一草ニ句ナルニ似テ二句
ニ韻ナルヲ見ルニ況ヤ月花ニ登夜ヲ對セル看迷ニ自在
ノ人ナルヲヤ々々ニ言ハトハ世ニ至ノ語ニ至ハ十分ニ滴ヲ
成ルルヲ夜ハ八分ニト云ハナリ他ニ世余ノ銘類モ條朝ニ
管ニ只以紀納言ト種々ノ體格ヲ見合スレ

平の文鑑末九

日記類

邑産云羽終葉記

庚午紀行

自出終葉記

碑文類

離林詩假名碑銘

圖司公誌

弔文類

生身龜心系文

弔許上之文



本館文藝

平山のさくらや

かきけり角のうらむらひ

紀行記ハ元禄ノ庚午ナラシカ四ニ傳ルモ多クト或ハ紀行
 上モ云ル其紀ハ貞吉ノ秋ナレシ去ルヲ武以ノ芭蕉ニ庵ニテ
 紀行ヲ取捨シ至ル元禄ノ辛未ト見タレハ兩紀ノ文法ヲ取
 合セテ此篇ヲ成セリト又ユモ故有ノ各捨シ又章ノ故
 ニ幻住庵ノ脚ト記上ニ通ノ遠イニ如ク度モ取捨シ
 至ル人ハ秘蔵シテ各傳ス故ナリ見ル人ハ尤モ点檢
 去レハ紀行ノ婉麗ナル是ヲ詩手ノ人モ稱シ是ヲ連帆ノ人モ

子ニ至ルハ芳野ノ花ニ至リテ一唱一和ノ作ヲナク又函ニ至リニ
 筆ヲ絶タル是ヲ又早ノ履實ニシテ是ヲ又早ノ起結ト
 云ハスヤ尤モ我師ノ碑文ニモ此等ノ奥義ヲ云ルナリ或名所
 雜ノ句ノ古又ハ蕉山ノ式同ニ證句アリテ端牛ノ句ハ雜体ト
 云ル或ハ猿面ノ類ナラシ傳 但レ此記ニ用ル所ノ故夏古語
 ナト數多ク中ニ芳野ニ接章ノ二字ハ誰ニカラン知ラズ
 或ハ早ト各タルモアリ尤モ詩カキノ作者ナラシカレハ此記
 ノ結又ハ端牛ノ句ニ各捨テ其終リヲ調ハルモ先ハ紀行
 ノ様樣ナカラズヤ子ト童解ノ争イヲ高セテ渾中ニナリ
 榮落ヨリ人向一世ノ夢幻ヲ觀シタル例ニハ端ノ骨節ノ

多しあはれいふく非もあふく風情もあはれ風情あはれ
う秋の下打のそやあはれん秋の上のそやあはれん
のれのおれくとと君の月片し世のふくとあはれ

和云世記は在周カ齊物ヲ類トシテ題名ハ但シヨ備中ノ詞ナリ
去ル起スニ客名ニ子ヨリ空ヨリテ各ナキ物トハ是ヲ終子
志トシテ有ルハ百五ヲ即破スレ去ルハ一編ノ故也又古語ニハ
例ニ和漢ノ自在ナカラフ意廣ノ對新書ナリヨリ花鳥ニ
雲水ノ對ハ誠ニ世々編ノ齊ノ節ニシテ我師ノ奉情ハ二句
ニ見徹スレ或ハ水ノ蛙トハ在中將ナリテ立陶ノ古々
ヲ西行ノ考ト取合セタル是モ又陶ノ注トヤスハ増シテヤ馬ニ

佳信ノ古考ヲウケ佳信ニ和考ノ各同ヲウケ先全ク又陶ノ
文法ト知ルレシ或ハ鳥ノ葉ノ句評トハ我師ニ發悟ノ故アリテ
湖南ニ曲翠尊ノ夜話ナル先ニ陳情表ニ世古アリ或ハ
芳野山ノ句トハ陳實紀行ノ芳野部ニ一考書ヨリモ軍書
ニ悲シク芳野山ト云ル我師ノ雜句ニ隱士和事ト難陳ノ詞
テ故云羽ニ芳野ノ夜光トナキ故ヲ明セリ或ハ風草ノ風情ノ論先
ニ六言ノ松喬ヲ撰シテ後ニ續五論ノ拾遺返下リ總テ雜語ノ
理論ナリ或ハ今ノ上ニ經トハ我師ノ在互條ヲ註シテ一句ニ六句
ノ姿情ヲ附方ケテ五言卷ラ一考仙ニ陶合セタル八度ノ變化ヲ
云レナリ但シ柳子庵ノ遺稿ニ在リテ書肆ニ出サス然レハ一編

其録

あつていこい 此より國北 へよりいふ
 昔より昔より なるなるに 人あつてに
 あつていふに 言ひあつてに 新あつて
 作の玉川の みるみるの みるみるを
 くらしてよれ 言ひあつてに 昔よりいふ
 遠くを東の なる川や け世とあるの
 とあつていふ なるなるの なるなるを
 河の流るる なるなるの なるなるを

とつていふ 昔とあつての くらよんを
 みるみるの なるなるの なるなるを
 なるなるの なるなるの なるなるを

碑陰 維石不言 謎文以傳

狂云此碑ハ洛東 雙林寺ニ在リテ頓河西行ノ墓ニナリ
 但シ本朝ニ假名ノ碑ノ始ナラシカ其ノ年ハ寶永庚寅ノ春ナリ
 去ル此銘ハ三十一句アリテ起結ニ假名ノ韻ヲ用ルニ中間ノ
 九二句ハ七字ノ謎ニシテ其ノ三句ニ毛首尾ノ約アリ然レハ

心もいふ偏ハ重 誰ナニ似タト云ニ云ノ困ラシクハ刺録ニ
寄ロトハ生見理ノ意ヲ結ヒ録ノ幸免成サニハ全文ノ趣ヲ
頭ハス誠ニ七維八極ノ体ナリ但シ世及ハ我師ノ千名ヲ即破
スレ

弔許六文

渡部

江守の許六といは雅之次郎の男ト云々
藤とひびく之ト詞林ノ又云々
天トの記と云々
野心石所の大將ト云々
云々

江守の許六といは雅之次郎の男ト云々
藤とひびく之ト詞林ノ又云々
天トの記と云々
野心石所の大將ト云々
云々

神師もむ坊をひきりて方々のなりて神師の作意
の伝ひ多しんま作をたぐりたるをたのむ其人の
作との可くあらざればとなく海の直なるありとて
まじくまはれぬ神師の作をたのむとて馬祖の非心
非仰とあはれずして神師をたのむのこのまじく
破すのこの何とて言語の作不作とあはれぬ海を
五老并に能書とけりて又果とていひて天下の人を
足向とせしむ終よとて人よとて神師と
作の中此一人とて終よとて人よとて神師と
てあれてえとて方々のなりて神師をたのむ

まふん此選文選のまふ論ありて筆陣の強よまふ選
るまふて神師をたのむの秋のまふのまふまふまふ
此秋のまふのまふまふの論とて世の信は信ら
ぬれぬ又まふのまふまふの面よりまふまふ
神師の敵とてしんや神師をたのむまふまふ
やまふとて神師の熱意ありてまふとて選場の結よ
狂云此言ゆ一都ノ結文トハ先師カワテ選文選ヲ思フ至テ
終ニ其言又ノ成ラステ言ニ文鑑ヲ選スル時ハ物ニ其人多ク
觸レキテ今ヤ此選ノ半端ニ到リテ其人多ク其言ニ情ヲ
尚情ハ一故ニテ然レハ一言ノ趣ハ始ハ韓信カ將種ノ男

此書は、人々を假名文から正しく書かせること、
京師の書林より、下より、
と、
と、

享保戊戌夏六月上浣

江戸日本橋南二丁目

書目林

小川彦九郎

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛

